



古紙はどう利用されるの

回収してまた紙にする

使い終わって、いらなくなった紙や板紙、それらを切るときに出るくず紙のことを、古紙といいますが、古紙は、古紙パルプの原料となります。今は、代表的なリサイクル資源として、さかんに利用されています。

いろいろなルートを通じて集められた古紙は、製紙工場で水を加えて元の繊維状にもどし、これをもういちどパルプにして利用します。紙の色をそれほど白くする必要のない板紙は、このまま原料とされます。ふつうは、古紙についているインクをぬき取り、水洗いし、ひょう白して白い紙にします。この紙は、新聞用紙やそのほかの印刷用の用紙、トイレトーパーなどにも利用されます。

日本の製紙用主要原料の使用割合（1996年）をみますと、パルプが46.7パーセント、古紙が53.2パーセントとなっています。また、日本の古紙の回収率（1996年）をみると、51.0パーセントに達しています。

古紙を原料として製造した紙を、「再生紙」といいます。日本では、再生紙の利用が積極的にすすめられています。

資源ごみの回収

日本で出されるごみは、ばく大な量になり、これを処分するのは、大変な仕事になっています。どこでも、ごみの捨て場に困っています。そこで、捨てるごみの量を減らそうという運動が、各地で行われています。びん、かん、新聞紙などの資源ごみは分別して回収し、もういちど利用しようという動きもさかんです。（監修・青木 国夫）

